
見開き 2 ページ

arere

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見開き2ページ

【Nコード】

N1251L

【作者名】

arere

【あらすじ】

無気力大学生と、歴史に名を残したい偉人たちのハートフル(?)コメディ。ちまちま更新中。

0・天国へのプロローグ

0・天国へのプロローグ

とにかくこの世界はつまらんわけだ。

うちに金はなく、日本の景気は落ちるとこまで落ち、日々のニュースはとことん暗く、就職は絶賛氷河期中で、そんな時代に俺たちはと言えば史学科の大学院志望。

まあ、唯一の救いは、同じ地獄への道を歩む友人がいることくらいか。

「なあ、これ以上生きてる意味ってあるかな」

眼下の川べりでは、何も考えてないように呑気な顔をした幼稚園児たちが、耳触りな奇声を発しながら水遊びと言つ名の戦いを繰り広げている。

「ねえな。でもまあ、『燃えよ赤チエック』の最終話を見るまでは生きるけど」

子供が死ぬほど嫌いな幹也は、さつきからマライオンのような顔して俺に買わせたドーナツをほおばっている。

そこそこ整った顔をしているはずなのに、すべてをぶちこわすようなやる気なさげな垂れ目が、よりこいつの不機嫌さを強調しているようで結構怖い。

「もうなんか俺疲れた。『燃えよ』の最終話は天国からチエックすることにするよ」

「んだよ三郎、自殺願望か。お前あれだ、くれぐれも人様に迷惑かけないところでしろよ」

7個目のドーナツが、幹也の腹に消える。

「自殺か……でも自殺はいくないよね。て言うか俺、自殺計画すんのすらめんどくさい。だから生きる」

「それにまあ、死んでも天国に行ける保証ないしな。死んでも天国に行くための活動が待ってるかもしれないねえぞ、天活的な何かが」
「死んでまで苦勞しなきゃいけない世の中なのか……はあ、それなら生きてた方がいいかな。生きてたら確実に発売日に『燃えよ』のコミックスも手に入るわけだし」

「だな。つーか、そろそろ場所を変えねえか？ 俺の許容範囲を超える赤さんどもが来やがった」

ぼんやりと宙を見ていた目を幹也の背後に向けると、川の向こうから行軍よろしく大量の園児たちが押し寄せてくる。

「あーもう、子供は氣樂でいいねえ……」

並んで座っていたベンチから立ち上がり、だるくて仕方ありませんと主張するような足取りで土手を上がって、横断歩道を渡り、

「危ない——！！」

「は？」

ようやく生きる決意を固めたところで、俺たちはトラックにひかれて、死んだ。

1・やはり就活的なものからは逃げられない

痛みとか悲しみとか、それどころか疑問すら感じずに、俺たちはただ、「ああ、死んだんだ」と思った。

その感覚は言葉じゃ説明できないけれど、ただ当たり前のように俺たちは自らの『死』を受け入れ、ここに立っていた。ここ、つまり、何か面接会場みたいな――

「はい次！ あんたら！ 名前は？」

「……誰？」

俺と幹也の前では、白くゆったりしたローブのようなものを身に付けた、これと言って特徴のない男が、苛立たしげに机の上の書類にペンを走らせている。

「天使には見えねえな……なんだよ、死んだら美人な天使のお姉さんが迎えに来てくれるって信じてたのに」

「お前バリバリ無神論者って言うてたじゃん」

幹也の本気で残念そうな言葉にツツコミを入れつつ、俺はあたりに視線を巡らせた。

一見すると、真っ白な壁に囲まれたこの部屋は、病室のように見える。

けれど、俺達の後ろには人種も年齢も性別もバラバラの人たちがずらっと長蛇の列を作っていて、そのさらに奥では、目の前の面接官的な男と同じ服を着た人たちが列の整理にいそしんでいる。

「まったく、忙しいんだからはいさしてくださいよ！ ほら名前！」

「あ、はい！」

ぼーっと部屋の中を見回していた俺たちの様子に、面接官が今度こそブチぎれたような声を出すので、俺たちはあわてて前に向き直った。

「俺は南三郎です」

「河野幹也」

「はいはい……まったく、今日は随分景気よく死んでるんだ、とつと答えてくれりゃいいもんを……」

ぶちぶちと文句を垂れ流しながらも俺達の名前を紙に書きこんだ面接官は、まるでネコでも追い払うかのように手のしぐさだけで俺達に出ていくよう指示すると、うんざりとした声をはりあげた。

「係員の指示に従うように……はい次！ あんたの名前は！」

「………天国つて、こんな場所だったのか……」

あわただしく俺達に寄ってきた白ローブの男にわけもわからず誘導されながら、俺たちは随分と慌ただしい『天国』の様子に、ただただ目をみはるのだった。

「ミナミサブロウ氏、コウノミキヤ氏、で間違いございませんでしょうか？」

「あ、はあ、まあ……」

蛍光灯の明かりに照らされたこれまた真っ白な廊下を歩きながら、俺達の誘導役になった男が、さっき面接官から渡されたカードのよくなものをやたら丁寧に読み上げる。ちらりと覗きこめば、カタカナで書かれた俺達の名前の下に、見たことのない文字で細かい文章が詰め込まれている。

この誘導役もまたこれと言って特徴がない男だけれど、顔だちだけ見ればまったくの欧米人だ。さっきの面接官も欧米系だったし、天国のスタッフはどうやら語学にたけているらしい。

「日本国北海道札幌市にてご逝去、21歳……はあ、21歳にして……」

俺達の夭折を憐れんでいるのかなんなのか、ため息をつく男に気付かれないよう、隣を歩く幹也にそつと耳打ちする。

「なあ、俺達、マジで死んだんだよね？」

「ああ、よくわかんねえけど、確かに俺たちは死んだらしいぞ。

つか自分でなんとなくわかる。気味悪いけど」

「じゃあ俺達これからアレ？ 天国に行くか地獄に行くかの裁判受けるのかな？」

「そうかもな……くそ、こんなことになるならもつと仏教系の講義取つとくんだった」

はたして大学の講義で死後の裁判のポイントなんて解説するのは疑問だし、そもそもそれってキリスト教の話じゃないのかとも思うけど、とにかく当たり前だが死んだのなんて初めてだから、勝手がわからなくて若干不安になる。

「俺……死ぬ時お前と一緒によかった……」

「ま、裁判で天国と地獄に別れつかもしんねえけどな。俺めっちゃ天国行く自信あるし。三郎は優等生だけど腹黒いからどうなるかな」

「おまつ……」

真つ黒な垂れ目を勝ち誇ったように歪めて笑う幹也をどつこうとした時、いきなり誘導役の男が立ち止った。

「こちらが待合室になります」

「は、はあ……」

男が指示した扉は、銀行の金庫の扉のごとく巨大で頑丈そうな鉄扉で、上の方に7カ国語で『特別待合室』と言う文字が刻まれている。

「本日は一般待合室の方が混みあっていて職員が出払っているもので……若干時間がかかるかもしれませんが、今しばらく御辛抱ください」

「え……」

男の言った『一般待合室』と言う単語が気になり、尋ねようとしたのだけれど、男自身も忙しいのか、あわてたような手つきで扉に備え付けられたダイヤルを回して扉をあけると、「それでは私はこれで」と言い残して足早に立ち去ってしまった。

「……なあ、これってどういうこと？」

「まあ、特別っちゃあ特別だな」

ゆつくりと開いた扉の向こう、一面に敷かれた毛足の長い真っ白な絨毯のところどころに巨大なワインレッドのクッションが配置され、シャンデリアのぼんやりとした明かりに照らされた部屋の様子が呆然とする俺達を残して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1251/>

見開き 2 ページ

2011年10月7日01時20分発行